

学部留学生の授業外日本語使用の現状

著者	木下 希美
雑誌名	長崎外大論叢
号	14
ページ	243-250
発行年	2010-12-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1165/00000149/



学部留学生の授業外日本語使用の現状

木下希美

The Current Situation of Japanese Use by Overseas Undergraduate Students out of Class

KINOSHITA Nozomi

Abstract

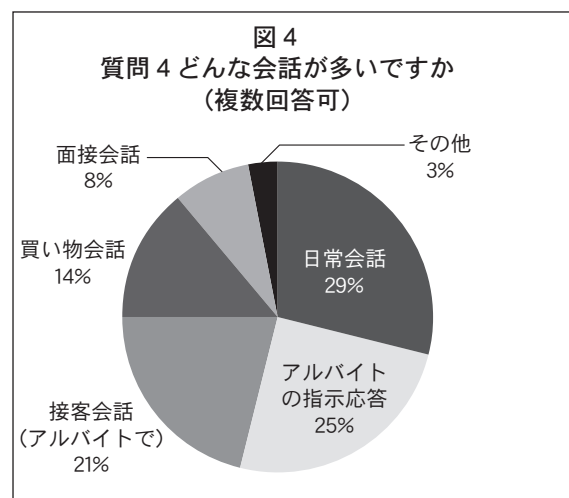
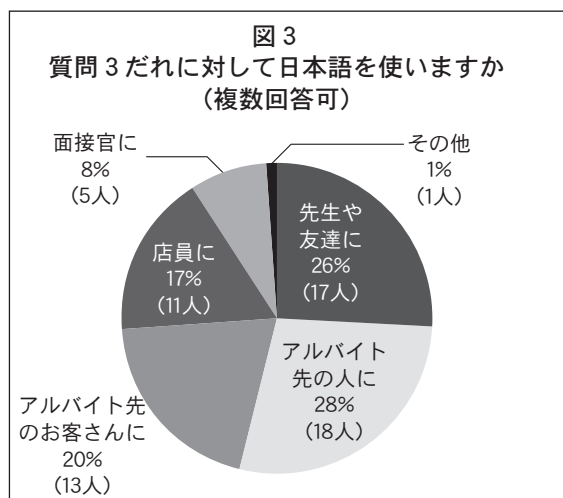
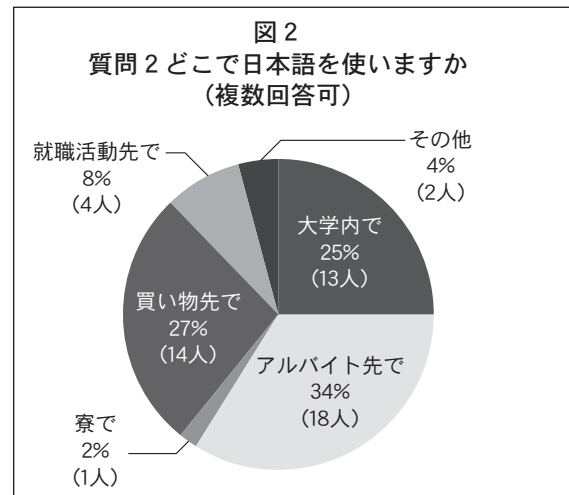
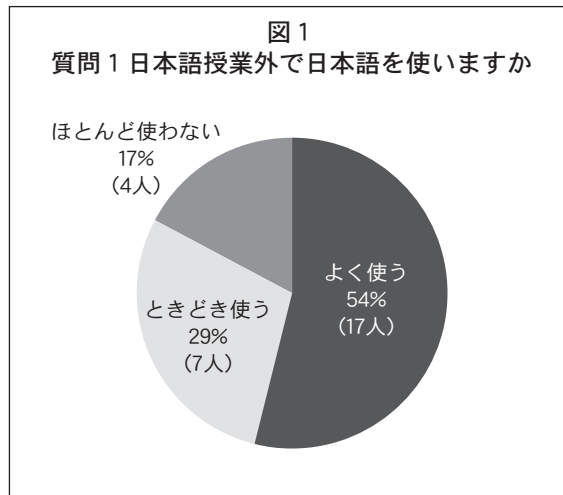
Recently, the number of international students in our college is increasing rapidly. Therefore, the number of people in the classes has increased, but the chance for the students to speak Japanese during lessons has decreased. Then, how about Japanese use outside the class? I investigated a current situation of Japanese use out of class for all overseas undergraduate students in the college. A structured questionnaire was distributed and collected, to all grades (1st year to 4th year student) of overseas undergraduate students in the college, from July 19 to July 23, 2010. The students were stratified by the grade for analysis. The outcome showed the rate of Japanese use was positively correlated to the grade with statistical significance.

1. はじめに

2010年春学期時点での本校の学部留学生の総数は休学している学生を除き、268名である。本来ならば学部留学生の日本語能力は日本語での学部授業において、同じ授業に在籍する日本人学生と遜色なく渡りあえるほどの力を有していなければならない。しかしながら、本大学の昨今の留学生急増に伴い、留学生の日本語能力の差が顕著になりつつある。このような状況の中、留学生が受講できる日本語科目は基本的に1週間に4時間（1回90分授業）と十分とは言えない。それに加え、クラス内の人数も増加傾向にあるため、授業内での日本語使用率もおおのずと少なくなっている。では、それらを補うため、または留学しているというメリットを最大限に生かし、授業外で日本語を使用し、日本語能力の向上に努めている学生がどのぐらいいるのだろうか。2010年7月19日から7月23日にかけて、全学年の留学生を対象に、授業外での日本語使用に関し、質問紙による調査を行った。学部留学生268名のうち169名から回答を得た。（調査は日本語の授業内で行われた）本稿では、その調査結果を報告する。

2. 1 調査結果分析（4年生）

2010年春学期時点で4年生は77名在籍しており、そのうち24名の学生から回答を得た。日本語の授業以外で日本語を使うかという質問に対しての結果を図1に示す。「よく使う」と答えた学生は55%、「ときどき使う」29%「ほとんど使わない」は16%であった。「全然使わない」と答えた学生はいなかった。次に、授業外で日本語を使うと答えた学生に対して、どこで使うかの質問の回答は図2のようになった。アルバイト先でという答えが最も多く34%であった。



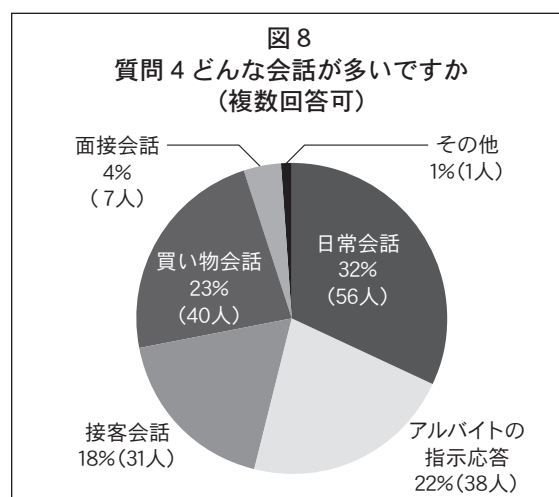
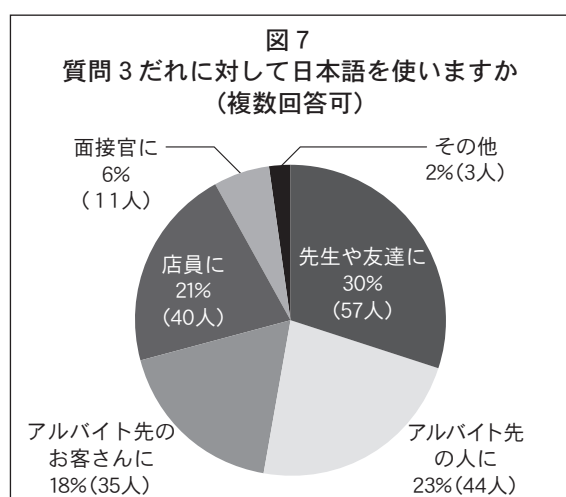
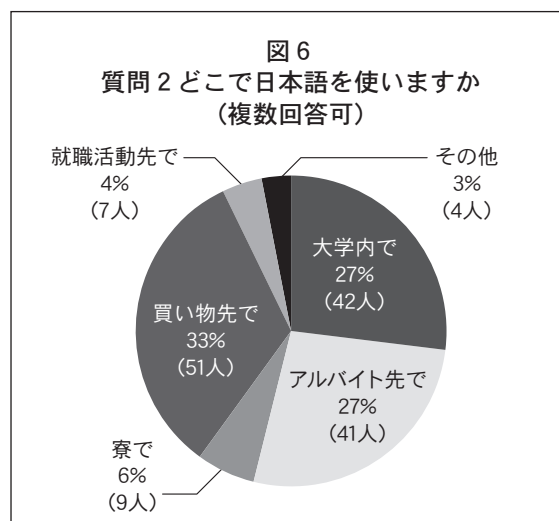
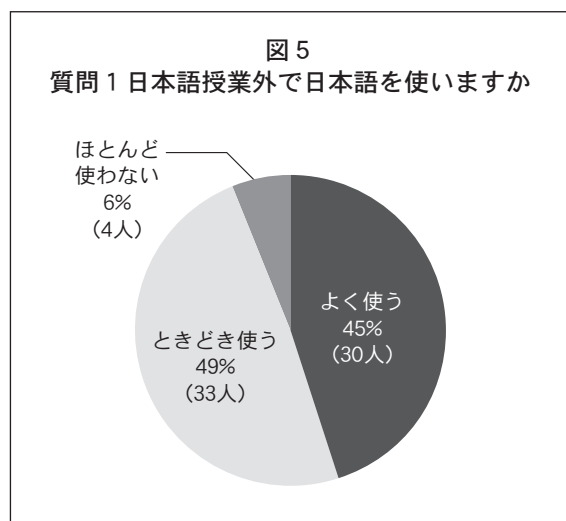
「大学内で」が25%「買い物先で」27%、「就職活動先で」8%、「その他」は4%であった。その他の回答の中には「ネットゲームで」「スカイプで」「飲み会で」というものもあった。だれに対して日本語を使うかという質問の結果を図3に示す。「先生や友達に」が26%、「アルバイト先の人に」は34%と最も高い。「アルバイト先のお客さんに」も20%あり、アルバイト関係の回答を合わせると48%で授業外での日本語使用はアルバイト先で多く行われることがわかる。質問4のどんな会話がが多いかの回答は、「日常会話」29%、「アルバイトの指示、応答」25%、「アルバイトでの接客会話」が21%である。アルバイト関係を合計すると46%となる。気になる点として、質問2のどこで日本語を使うかの答えの中に「買い物先で」というものが27%ある。私たちが日常、買い物先、つまりスーパーやデパートやコンビニエンスストア、その他商店で行う会話にはどのようなものが考えられるだろうか。例えば、コンビニエンスストアでの会話を考えてみよう。店員が「このお弁当温めますか」という問いかけに対して、「はい、お願いします」等の会話ぐらいではないだろうか。スーパーでも全く言葉を発せず買い物をするができる。質問2、3、4の買い物先で、店員と、会話するというのは、日本で生活していて、日本語を使用しているように感じるのかもしれないが、実際の日本語使用率は極めて少ないと言えるのではないだろうか。

さて、授業外で日本語を使うかとの質問に「ほとんど使わない」という学生が4名いたが、その理由として、「日本人の友達がいらないから」が3、「アルバイトをしていないから」が2、「その他」が

1であった。(複数回答可)以上、4年生の現状を見てきたが、全体として、4年生では、アルバイト先という別の世界があり、大学以外の違う社会との繋がりを感ずることができる。しかし一方で、日本人の友達と、もっと深い話がしたいという意見も寄せられていた。

2.2 調査結果分析(3年生)

次に3年生の結果を見てみよう。3年生は総数82名のうち、69名から回答を得た。授業外で日本語を使うかの質問には「よく使う」45%、「ときどき使う」49%と「使う」と答えた学生が全体の9割を超えた。ほとんど使わないと答えた学生は6%であった。4年生(図1)と比較してみると、「よく使う」学生が10%少なくなり、反対に「ときどき使う」とした学生が20%増加する。では、どこで使うかの質問に対する答えはどうだろうか。図6を見てみると、「大学内で」と「アルバイト先で」が同数の27%となっている。「大学内で」とした学生が4年生(図2)とほぼ変わらないのに対して「アルバイト先で」とした学生は7%減少している。「買い物先で」の学生も33%と4年生と比べ、6%増加する。だれに対して使うかの質問(図7)には、「先生や友達に」が30%、「アルバイト先の人に」が23%、「アルバイト先のお客さんに」が18%で、これらアルバイト関係を合わせると、41%である。「先生や友達に」が4年生(図3)と比べ、4%増え、反対にアルバイト関



係は7%減少している。ここから大学以外の社会との関係が若干希薄になっている傾向が伺える。どんな会話が多いかの質問(図8)でも4年生(図4)と比べると、5%少ない。反対に「買い物会話」は4年生が14%であるのに対し、3年生は23%となり、9%多くなっている。買い物会話の日本語使用率が低い可能性があることは前述したとおりである。授業外で日本語を「ほとんど使わない」とした学生は全体の6%で、人数にしてみると4名である。その理由としては、「日本語がわからないから」1、「日本人の友達がいらないから」4、「アルバイトをしていないから」3、「日本語を使う必要がないから」2、「その他」1であった。(複数回答可)「その他」の理由は「中国人が多すぎるから」というもので、さらにこの回答者は「中国人が多すぎて留学の感じがあまりしない。ここに来たことを後悔している。」とのコメントが記されていた。中国人留学生の急増に伴い、授業内、学内で日本語使用率は少なくなり、さらにアルバイトをしていない学生にとっては学外の社会との繋がりを持たない学生もいると推察でき、このような学生が今後増えていくのではないかと危惧している。確かに、「大学内で」「先生や友達に」日本語を使うという回答も無視はできない。しかし、やはりより多くの日本語会話はアルバイト先で行われていると考えられる。アルバイトは日本の社会を知る上でも、授業外での日本語使用率を増やすためにも必要なことであると思われるが、授業外の日本語使用がほぼアルバイトによってなされていることに、多少の違和感を覚える。以上3年生の授業外日本語使用の現状である。

2.3 調査結果分析(1、2年生)

次ページに1、2年生の調査結果を図(9~16)に示す。2年生55名のうち、29名、1年生54名のうち47名から回答を得た。結論を先に述べると、4年生から3年生の変化を顕著にした結果となった。さらに、2年生、1年生では日本語授業外で日本語を「よく使う」と回答する学生が少なくなり、1年生においては「ほとんど使わない」が17%いる。理由(複数回答可)として、「日本語がわからないから」1、「日本人の友達がいらないから」3、「アルバイトをしていないから」5、「日本語を使いたくないから」1、「日本語を使う必要がないから」2「その他」の回答として「日本語を使用する意識がない」というものもあった。また、1年生の結果(図12)を見てわかるように、どこで使うかの質問に対して「アルバイト先で」という回答が減っており、2、3、4学年と比べると授業外日本語使用率は減少していると考えられる。ただし、1年生に1名、どこで、「社会福祉施設」で、だれに、「老人に」、どんな、「ボランティアで日常会話」というものがあり、アルバイト以外で日本語を使用する機会を見つけた学生もあり、今後、このような学生が増えることを期待するものである。さらに一点付け加えたいことがある。それは授業外での日本語使用を「ときどき使う」とした学生と「ほとんど使わない」とした学生についてである。2年生で、「ほとんど使わない」と回答した学生1名は、大変優秀な学生であり、日本語の能力も高い。筆者とも授業の前後でよく会話するため、調査後、なぜこのように答えたか理由を質問したところ、学内で友人に挨拶するなど、少しの世間話をすることは、日本語を使うという中に入らない、自分は今大変焦っていると答えた。また、1年生の中で「全然使わない」とした1名の学生も授業ではよく日本語で発言する学生であり、同じように質問したところ、上記2年生学生と似たような答えが返ってきた。反対に「ときどき使う」とした学生の中に、挨拶程度の学生が少なからずいるのではないかと考えられる。

図9
日本語授業外で日本語を使いますか
2年生

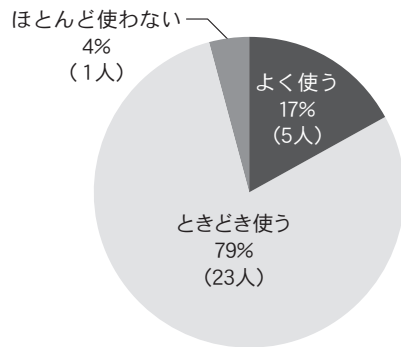


図10
日本語授業外で日本語を使いますか
1年生

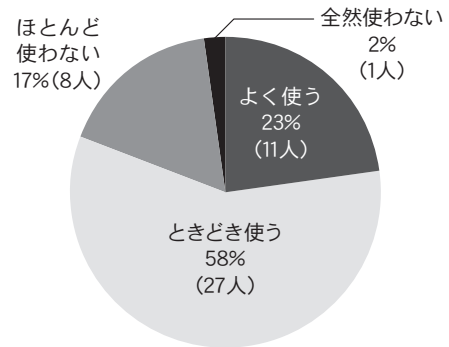


図11
どこで日本語を使いますか
2年生

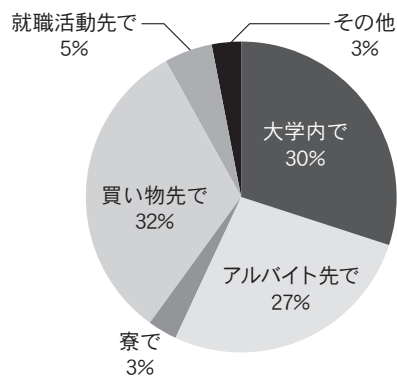


図12
どこで日本語を使いますか
1年生

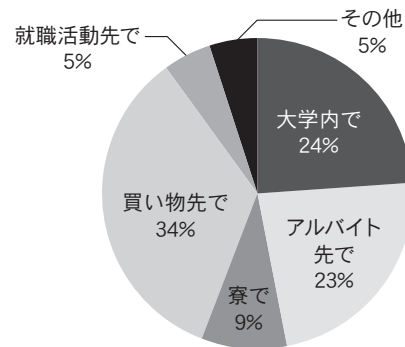


図13
だれに日本語を使いますか
2年生 (複数回答可)

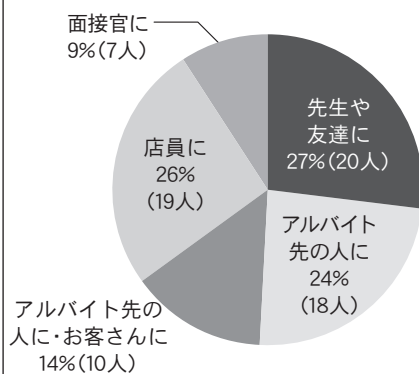
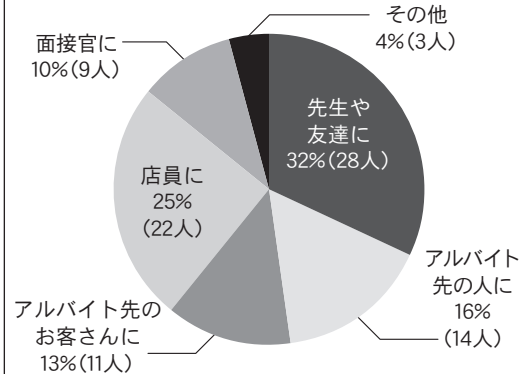
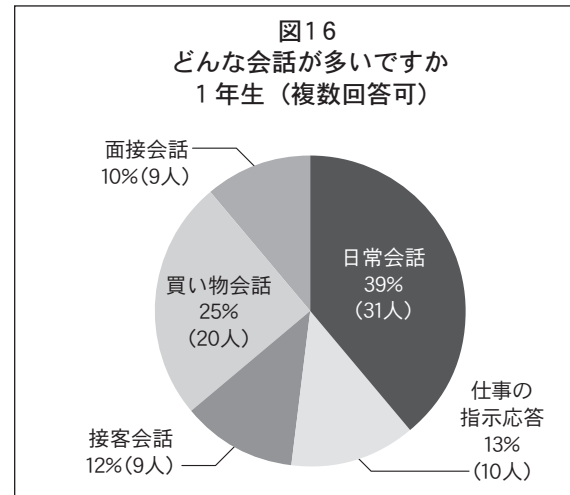
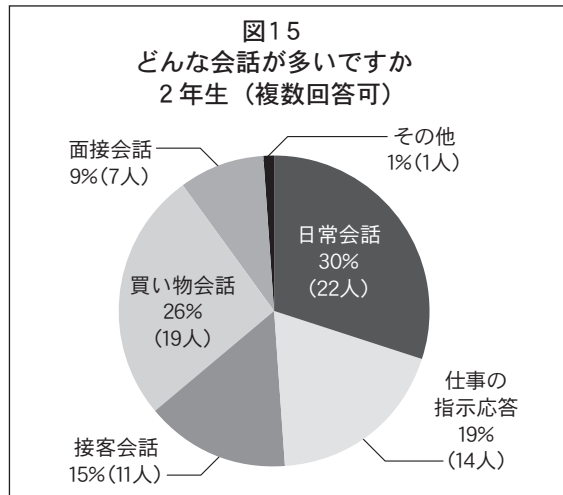


図14
だれに日本語を使いますか
1年生 (複数回答可)

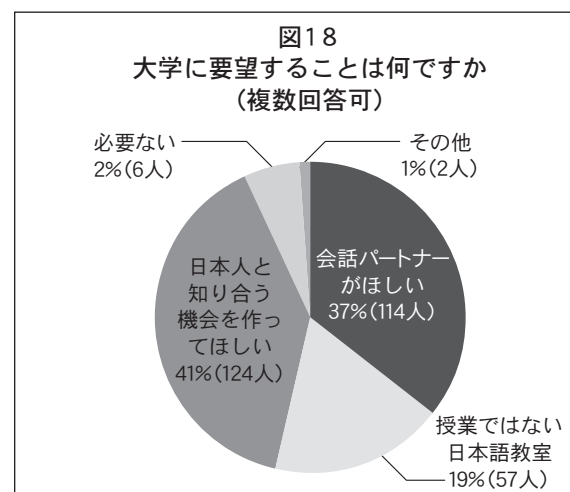
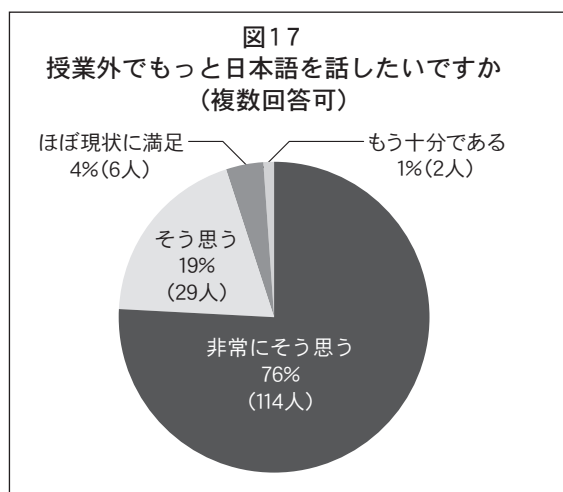




3. 今後の課題として

これまで、本大学の学部留学生の授業外日本語使用の現状を見てきたが、筆者は結論として、学部留学生の授業外日本語使用率はあまり高くなく、学年が下がるにつれてその傾向も強くなっていき、授業外日本語使用のほとんどがアルバイト先で行われていると考える。学生はこの状況をどのように感じているのだろうか。図17、図18から考えてみたい。授業外でもっと日本語を話したいかという質問に対してであるが、「非常にそう思う」と答えた学生が全体（1年生～4年生）で76%、「そう思う」の19%を合わせると95%である。「ほぼ現状に満足」、「もう十分である」の学生はわずか5%で、この5%の学生は4年生1名、3年生4名、2年生1名であった。ここからわかるとおり、ほとんどの学生が現状には満足できず、日本語をもっと話したい、使いたいという希望を持っている。では次に、大学に要望することは何かという問いには、「日本人と知り合う機会を作してほしい」が41%と最も高く、次いで「会話パートナーが欲しい」37%、「授業ではない日本語教室」が19%であった。「必要ない」は2%、「その他」は1%。ここから、学生は何らかの大学によるサポートを必要としていることがわかる。

では、大学にできることは何か。筆者は学生の回答として一番多かった「日本人と知り合う機会を作してほしい」に注目したい。ここは日本で、日本人はたくさんいるのだから自分で見つけるべきだ



という意見もあるかもしれない。しかし、多くの留学生はその機会に恵まれていないと思っているようだ。私たちの大学は多くの留学生、諸言語を学ぶ日本人学生が在籍している多文化状況にあるキャンパスでありながら、留学生はその利点を生かしきれていないのはなぜだろうか。松本（1996）は、「交流行動は私的な空間では起きにくく、ロビーやラウンジなど、私的空間とつながりを持ちつつも、ある程度公的な要素が含まれた空間で起こる可能性が大きい」と述べている。大学として、日本人、日本人学生と知り合うきっかけ作りをすることは必要なことだと考える。新倉（1996）は「留学生と日本人との接触の機会の少なさから、接触の不足が双方のステレオタイプの思い込みを生み、それが原因で思わぬ誤解、トラブルが生じる」と指摘している。このようなことが起こらないためにも、学生の日本語力向上のためにも、交流のきっかけ作りに尽力したいと考えている。

参考文献

- 松本卓三編（1996）『教師のためのコミュニケーション心理学』ナカニシヤ出版
- 徳井敦子（2002）『多文化共生のコミュニケーション—日本語教育の現場から』アルク
- 新倉涼子（1996）「留学生と日本人学生の相互交流と対人認知の変容—異文化理解授業の実践を通しての考察」『千葉大学留学生センター紀要』
- 野沢智子・坪田典子「クラスを超えた学び合い（2）—日本人学生英語クラスと留学生日本語クラス間交流—」『文教大学国際学部紀要』第15巻

